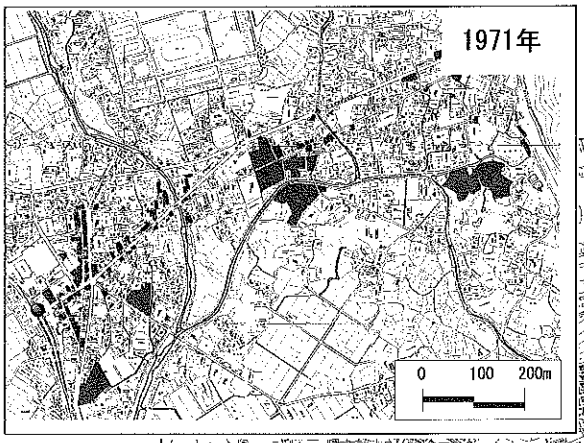
よかネット
YOKANET
No. 81　2006. 5
㈱よかネット

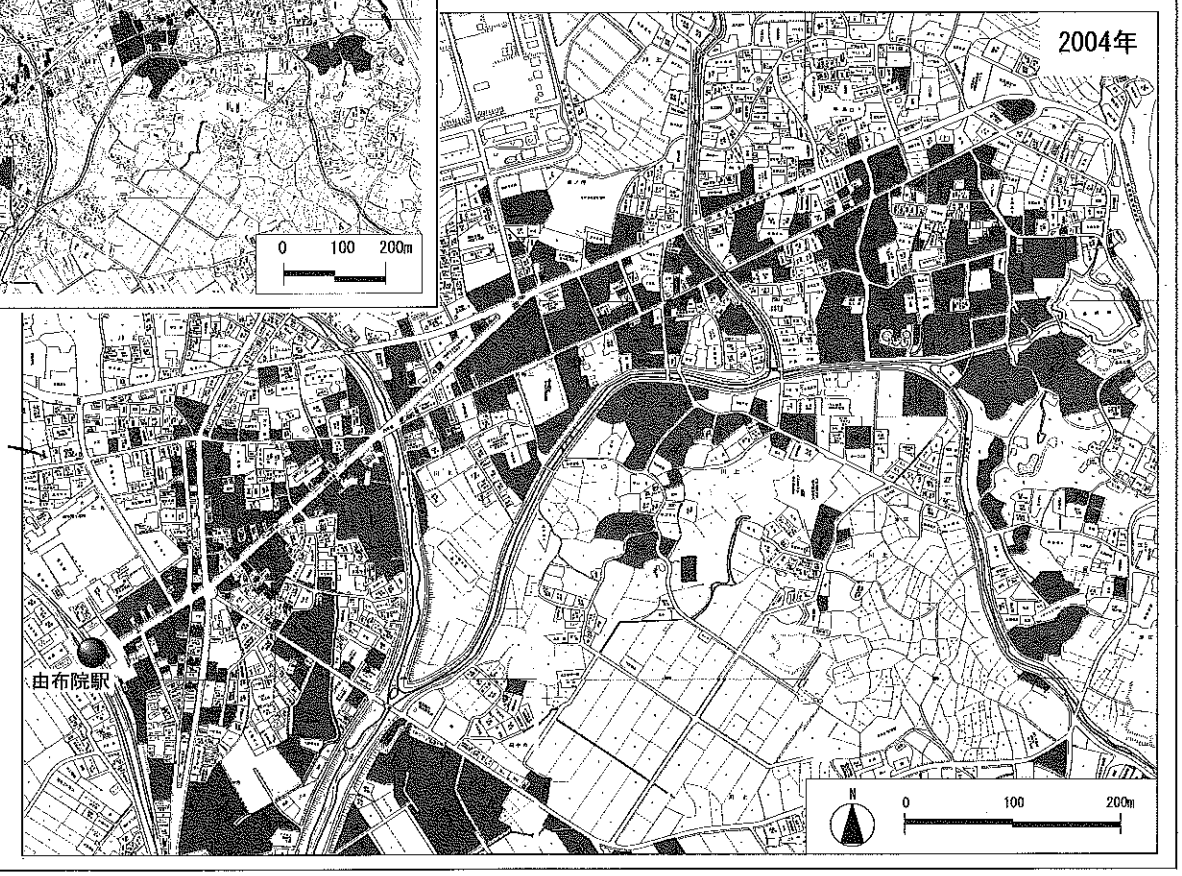
もくじ

NETWORK
街なか居住を進めるための方策を考える
～福岡県「街なか居住」の現状と制度内容の方向についての報告～ …… 2
由布院観光の経済波及調査
35年にわたるまちづくり、産業構造の軌跡と、観光の経済波及効果 …… 5
第２回糸島サロン報告
糸島の地域づくりで思うこと・感じること …… 9
柳川ベロタクシー運行実験報告 …… 10
今年で６年目を迎えた佐賀城下ひなまつり
少しずつ進められている人材育成 …… 11
見・聞・食
社団法人都市住宅学会九州支部　住宅政策シンポジウム報告
これからの住宅政策 …… 12
佐賀市富士町の山の幸をいただく …… 13
近　況
桜より先ず駐車場の広さに驚く「一心行の桜」 …… 14
パチンコ機械の進歩に脱帽
“パチンコ～冬ソナ”を体験 …… 15
鍾乳洞の泡盛と歓送会の酒 …… 16
第６回まちあそび報告 …… 17
本・BOOKS
『ケータイ・ネット人間』の精神分析 …… 17
お知らせ …… 18

●湯布院町の土地利用はこの30年間に大きく転換した



1971年と2004年の住宅地図の比較から、湯布院町の土地利用の変遷をみた。宿泊施設・駐車場・土産物屋が急増し、産業構造が大きく転換したことがわかった。（詳細は本文p５へ）



街なか居住を進めるための方策を考える

～福岡県「街なか居住」の現状と制度内容の方向についての報告～

山田　龍雄

●地方都市の中心商店街はワクワクする場所だった

最近、仕事の帰りに筑豊の地方都市である田川市、直方市、飯塚市の中心商店街に立ち寄って歩いてみると、空き店舗が増えたことが歴然としている。通りによっては半分以上空き店舗になっている商店街もみられる。筑豊出身の私は小学生低学年の頃、飯塚市の東町商店街や田川市の後藤寺商店街に、年に数回程度、蒸気機関車に乗って母親に連れていってもらうことが楽しみであった。昭和30年代前半、まだ炭鉱景気は真っ盛りの時代であり、筑豊の片田舎からみると飯塚市の東町商店街にはデパートもあり、子供からみると大都会であった。当時の商店街は人通りも多く、ワクワクするような気分の高鳴りがあった。

そのような雰囲気を知っている者にとって、今の商店街は寂しい限りである。“街なか”と言われる中心市街地は単に中心商店街だけの話ではなく、中心の街として古くから培われてきた祭りや伝統的な行事、あるいはコミュニティといった問題も含んでいる。現在、地方都市の中心市街地では郊外の大規模ショピングセンターやバイパス沿いのロードサイド店舗などの進出、中心市街地の居住人口の流出、自動車に依存した暮らしの進展などによって、街なかの商店街をはじめ、人口定住、コミュニティ、街の顔としてのシンボル性など様々な機能が衰退している。

●街なか再生がなぜ必要なのか？

まちづくり三法が制定された２～３日後であったと思うがテレビのニュースを見ていたら、大手ショピングセンターの社長が、今回の新たなまちづくり三法のひとつである「大規模店舗の立地規制」について『これまで郊外の大規模店舗が伸びてきたのは消費者が支持してきた結果であり、消費者ニーズを考えた場合に規制するのは時代に逆行である』といったコメントをしていた。市場主義一辺倒でいえば、その通りであろうが、今の大規模店舗の出店は、三浦展氏の著書である「ファスト風土化する日本」でも指摘されているように「深夜まで営業している大型ショッピングセンターのあるところでは犯罪が起きやすい」といった防犯上の問題もあり、既存の街なかでも人口が低下し、地域の祭りや行事が維持できないといった地域的な問題を生んでいる。街なかの既存ストックの活用や街づくりの観点からみると、やはり何らかの対策が必要であり、今回のまちづくり三法のひとつである土地利用規制については、もう少し早い時期での施行が望まれたのではなかったかと思う。

福岡県では一昨年より都市計画課が窓口となって「中心市街地再生検討委員会（以下「街なか再生委員会」という。）」を立ち上げ、2005年度まで検討してきた。この検討委員会では①街なか居住の推進、②街なかの賑わいの創出、③郊外大規模集客施設の立地調整といった３つの基本的な柱を掲げ、さらに各柱ごとにワーキングチームを組織し、検討してきた。

当社では、昨年度に住宅課が取り組んだ「新住宅総合基本計画」の策定の中の重点課題として「街なか居住の推進」を掲げ、この調査、計画のお手伝いをさせていただいた。

「街なか再生計画」は２月10日から３月７日、「新住宅総合基本計画」は３月27日から４月26日にかけてパブリックコメントが実施された。

そこで、街なか居住の実態や居住者のニーズ等をはじめ、街なか居住の取り組みの方向性について報告する。

●街なかとは？

街なか再生委員会でも「街なか」をどう定義するのか、「街なか再生」とは一体にどういう状態をいうのかが議論された。そこで「街なか

再生委員会」では、次のように定義された。

（街なかとは？）

・多様なサービスが集積し、車を使わずに暮らせる居住の場であり、地域に伝統・歴史を継承し、文化や雇用等を創出する場所。イメージ的には都市の中心部（概ね都市計画の商業地域程度）を想定する。

（街なか再生とは？）

・昔のように賑わっていた状態に“まち”を戻すことを目指すのではなく、現在及び将来の社会ニーズに対応した新しい魅力的な都市生活ができる場所を、これまでの基盤を活かしながら創ることを意図する。

●全市人口に比べ街なかの居住人口の減少率は大きい

街なかの居住の実態を把握するため、福岡県内の主な地方都市３市（Ａ市、Ｂ市、Ｃ市）を調べてみた。

ちなみに「街なか」を一定エリアで区分しないと人口が把握できないので、ここでは昭和35年当時の人口集中地区（１㎢の人口4,000人以上が連旦しているエリア）としている。

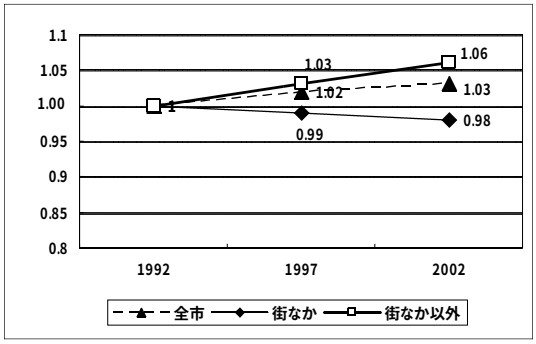
Ａ市は筑後地域の中心都市であり、全市人口は、ここ10年間で約7,400人増加しているが、街なかの人口は約810人程度減少している。街なかの状況をみると分譲マンションも供給されているが、やはり空き地や駐車場は増えている。また、街なかの中心部から街なか外縁部のマンションに移動しているらしく、街なか全体からすると、流出している人口の方が多い。

Ｂ市は筑豊の中心都市であり、炭鉱閉山後は北九州市のベットタウンや八幡製鉄の鉄鋼関連企業の発達によって昭和50年代までは人口が増加していたが、昭和60年以降は一貫して人口が減少している。ここ10年間では約3,300人減少し、街なかでは、この減少人口の約３割にあたる約1,040人が減少している。

Ｃ市は朝倉地域の中心都市であり、全人口は約500人しか減少していないにもかかわらず、街なか人口は全人口減少を上回る約540人減少している。Ｃ市では街なかでの住宅着工はほとんどなく、今後、益々街なか機能の低下が懸念されるところである。

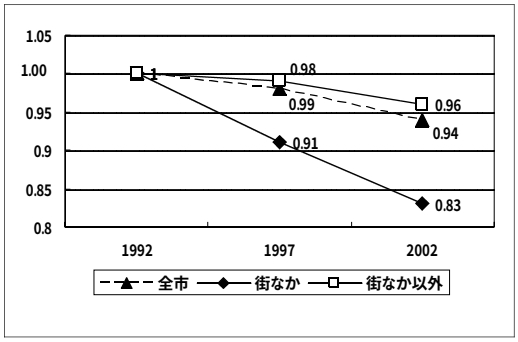
Ａ、Ｂ、Ｃ市の全市、街なか、街なか以外の人口の推移

（Ａ市）



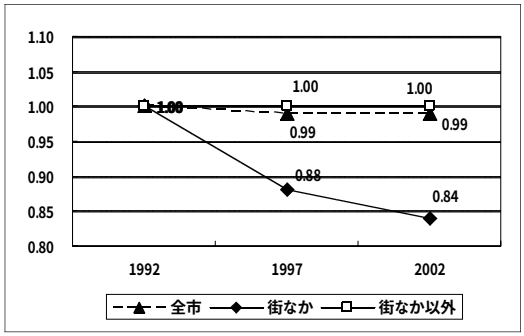
	1992	1997	2002
全市	227,668	231,631	235,064
(増減数)	－	3,963	3,433
街なか	75,595	75,199	74,385
(増減数)		▲396	▲814
街なか以外	152,073	156,432	160,679
(増減数)	－	4,359	4,247

（Ｂ市）



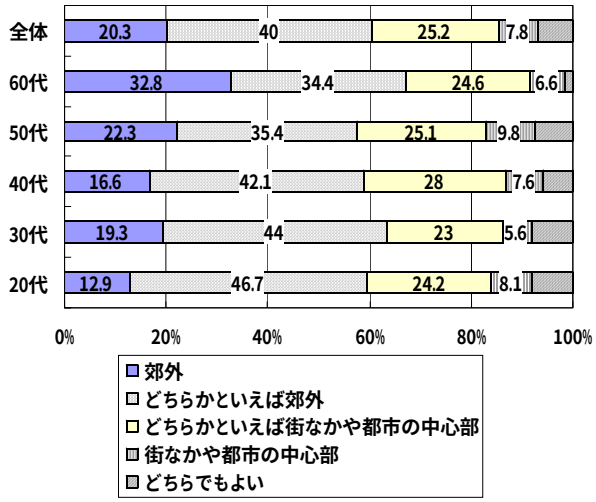
	1992	1997	2002
全市	63,314	62,129	60,021
(増減数)	－	▲1,185	▲2,108
街なか	5,920	5,392	4,884
(増減数)		▲528	▲508
街なか以外	57,394	56,737	55,137
(増減数)	－	▲657	▲1,600

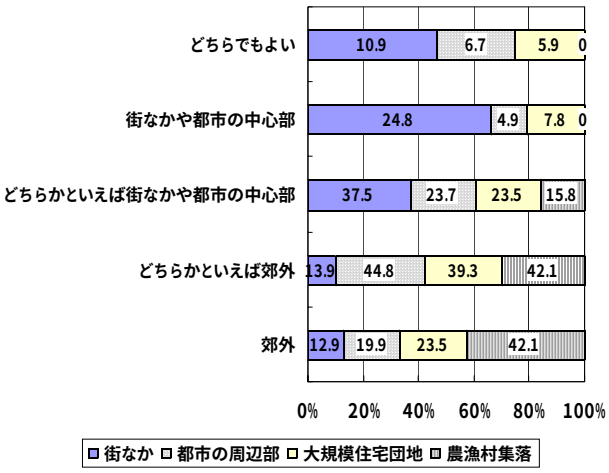
（Ｃ市）



	1992	1997	2002
全市	43,711	43,495	43,272
(増減数)	－	▲276	▲223
街なか	3,373	2,974	2,836
(増減数)		▲399	▲138
街なか以外	40,398	40,521	40,436
(増減数)	－	123	▲85

資料：住民基本台帳「町丁別人口」





資料：県民アンケート結果より抜粋

●街なか居住を選択する人は約３割

「新住宅総合基本計画」策定にあたって、県民の住宅選択の志向や条件についてのアンケート調査を実施した。アンケートはインターネットを活用し、県内在住者約650人に答えていただいた。

アンケートで、「あなたは郊外と街なかや都市の中心部のどちらに住みたいと思いますか？」という質問に対して、全体的には６～７割は郊外志向ではあるが、街なか居住の方を選択した（どちらかといえば街なか＋街なかや都市の中心部）人は約３～3.5割あった。特に60代の人でも約３割は街なか志向であり、１割程度は街なか居住を強く求めている。

また、現在の居住状況からみると、都市の周辺部や大規模住宅地に居住している人の約３割ぐらいは街なか居住を志向しているようだ。

一方、現在、街なかや都市の中心部に居住している人では約６割が、街なか志向であった。

●街なか居住は住宅のみではなく、街なか全体の魅力づくりが肝腎

街なか居住を検討するワーキングでは街なか居住の実態やニーズの把握とあわせて、既存制度でフォローしきてれていない問題点として①分譲系に対する支援、②コミュニティ形成に対する支援、③居住関連サービスに対する支援、④契約の適正化などの賃貸市場の環境整備などがあげられた。そこで、基本的な「街なか居住の方向性と実現方法のイメージ」としては次のようにまとめられた。

（施策推進の方向性）
①街なか住宅の質、規模の向上
②街なかの住環境の向上と密集市街地の改善
③少子高齢化に対応した居住サービス機能の充実
①まちづくり、住まいづくりを通じたコミュニティの再生
⑤安心でわかりやすい住宅市場の実現

（実現方法のイメージ）
◆街なか居住の魅力の向上◆
○賑わい施設の併設など、街なか居住に適した良質な都市型住宅の整備、誘導
○街なかの細街路整備、街区公園整備等、良好な居住環境の整備
○様々なコミュニティの再生に資する支援、仕組みづくり
◆住みやすくする施策◆
○住宅市場の環境整備
◆施策推進の視点◆
○ハード、ソフトにわたる各種の街なか資源の活用
○民間活力の活用

まちなか住宅のイメージ

（県の街なか居住推進のための支援事業）
①街なか住宅プラン支援事業
○街なか居住推進に係わる市町村計画（再生ビジョン）の策定や優良な街なか居住推進プロジェクトの企画等への取り組みに対しての助成
○事業概要：県1/2補助（限度額3,000千円／物件）
○対象者：市町村、民間事業者等
②既存ストック活用支援事業
○既存の建物の有効活用と空き家解消等による街なか居住の推進のため、子育て向け特定優良賃貸住宅や　高齢者向け優良賃貸住宅へ改修する費用に対しての助成
○事業概要：県1/3補助（限度額500千円／戸）
○対象者：民間事業者
③ にぎわい施設整備支援事業
○街なか居住機能の魅力向上を図るため、賑わいを形成するための施設（「にぎわい施設」）と特定優良賃貸住宅、高齢者向け優良賃貸住宅等、街なか再生に資する住宅と併設された利便性の高い住宅の供給に対しての助成
○事業概要：にぎわい施設との一体的整備を行う事業の建築主体工事費に対して県1/3補助に0.15を乗じて得た費用の1/3補助
○対象者：民間事業者

街なかに人を呼ぶこむ事例としては、福岡市都心部での人口定住政策が参考となる。特に博多部では昭和60年以降、バブル景気による地上げの進展、世帯主や従業者の郊外居住などの影響を受け、住宅から業務地への土地利用が進み、人口が減少した。そこて福岡市では都心部定住対策を行い、①ファミリー向け分譲住宅に対する建設費補助、②共同化に対するアドバイザー派遣制度などの施策を立ち上げた。しかし、都心居住に対して最も効果のあったのは地価が下落してマンション開発が進んだことであった。それと博多部では、４つの小学校を統合して新たな博多小学校を建設したことも大きい。４～５年前だったと思うが、東区に居住していた私の知り合いの人が、子供が産まれたことを契機に博多部のマンションに移り住んだ。そこで理由を尋ねてみると、「仕事や飲み会で夜遅く帰るときにタクシーを使っている。交通費まで含めたコストを考えると都心で居住した方がよい。また、新しい小学校が魅力的だ」というようなことを述べられていた。

このように都心居住では、単に街なかに、「そこそこ手頃な値段で規模も大きい住宅」を供給すればよいといったことではなく、これらの住宅供給とあわせて、子育てや高齢者のための居住関連のサービス、あるいは学校のレベルアップなど街なかの魅力を如何に高めていくことが大切であることがわかる。

●気運づくりや計画づくりから始める推進方策

現在、福岡県では街なか居住について、先ず市町村やＴＭＯ、地域協議会、地権者、ＮＰＯ等などの多様な主体の取り組みを促し、さらに実際に事業化を支援するための建設費補助などの事業施策を考えており、取り組み意向のある市町村や事業意欲のある地権者等を募集しようとしている。当社としても機会があれば、街なか居住への事業化のお手伝いをしていきたいと思うし、この制度がうまく活用されることを期待したい。

（やまだ　たつお）

由布院観光の経済波及調査

35年にわたるまちづくり、産業構造の軌跡と、観光の経済波及効果

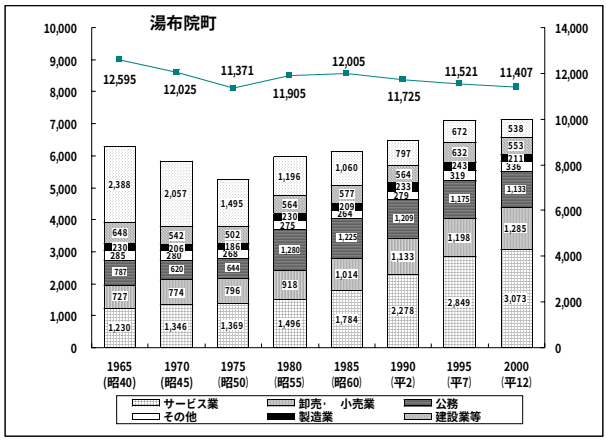
糸乗　貞喜

去年の十月、由布院から「観光産業の経済効果」について話があったとき、かなり興味を持てやってみたいと思った。由布院というテーマは、こういう問題についてはかなり良い素材である。それは1970年代以降、急速に展開してきた観光地の全プロセスがおおよそ分かり、経済構造の変化と対比してみることができるからである。

やってみるからには、その観光地としての発展を、次の三点にポイントを置きながら、考えてみたいと思った。

①由布院は観光によって、産業構造の変化と拡大が進んでいると考えられるが、その中で観光産業がとのような比重を持っているのか
②由布院の街が変わったとか、荒れたとか言われているが、実際はどのような変化なのか。それはどのようなプロセスをたどり、今後の街の将来にどんな影響をもたらす可能性があるのか
③観光産業の経済波及効果と地域経済との関わりの推計

産業別就業者数と人口



人口と就業者の関係（大分県は千人、全国は百万人）

区分	a人口	b従業地就業者	c常住地就業者	b/a (%)	c/a (%)
1965	12,595	6,295	6,337	50.0	50.3
1975	11,371	5,260	5,537	46.3	48.7
1985	12,005	6,133	5,988	51.1	49.9
1995	11,521	7,087	6,273	61.5	54.4
2000	11,406	7,129	6,131	62.5	53.8
2000 大分県	1,219	583	583	47.8	47.8
2000 全国	126	62	62	49.7	49.7

注）・75～85へかけての自衛隊の増加は、就業者の増加に寄与しているが、b/aの従業地への集中率を高めた要因になっていないとみられる。正確にはわからないが、聞くところによると6～7割が家族持ちだということである。単身者がそれほどでもないということは、町内の一般の世帯像と、それほど乖離がないと推測できる。どちらかといえば、観光関連の単身者のb/aを高めていると見ることもできる。

・bとcの違いは、前者が町内居住・町外居住を問わず、町内で働いている人。後者は町内居住で、町内外のどこかで働いている人。

今回、由布院観光協会から依頼された仕事は、③の経済波及効果の推計であったが、かなり不安であった。一般に、波及効果の推計は「産業連関表」でやれるように思われている。しかし実際はインプットすべきデータが全く整合しないので、別の仕組みを考え、それらに合うデータ作成に相当の力仕事を要する。その力仕事とは、多くの業種の事業所に対するインタビューとアンケート（配布、回収、分析）である。

インタビュアーはある程度、仕事の内容をわきまえながら質問し、回答を受け取るということができなければならない。その経験をベースにアンケート設計をして、配布、回収、分析というプロセスがこなせるかどうかについて、時間的ゆとりがあるかどうかに不安を感じていた。実際に最初のインタビュー（予備兼本調査）に取りかかったのは２月に入ってからであった（それでいて３月15日には一応のアウトプットを出せということ）。しかし動き始めてからのサポートは的確で、スピードもあった。さすがに由布院という看板を抱えて、一体となって観光地を作り上げてきただけに、そのパワーを強く感じた。

以下逐次前記三点について見ていくこととする。

●由布院観光は20年ぐらいで、周辺の町を含む地域の基幹産業になった。1975年の町と比べると、産業構造は大転換

以前に経済構造（就業構造で見た）の比較を、島根県松江市、福岡県柳川市、宮崎県綾町と併せて湯布院町についても調べてみたことがある。由布院はここ30年ぐらいの間に、急速に観光経済が拡大していると感じた。

湯布院町の産業構造は、1975～80年を境に全く別の変化を示している。グラフに示した就業者数の推移を見ると、1975年までは年々大幅に地域内で働く人が減っている（これは国勢調査の従業地ベースのデータである）。その減少分は農業就業者の減少と等しい。ところが、1975年以降は農業就業者が減り続けているのに、それをカバーするにあまりあるサービス業の就業増が続いている。

1975年以降の湯布院町は、全く別の町に変換してしまった。そのことは、人口と就業者の関連をみるとよくわかる。人口に対する就業者の比率は大都市などでは高く農村部では低いという傾向を示し、湯布院町などの地方市町村では人口の45～50％程度の就業が、一般的な状況である。'75年までの湯布院町では人口減と就業者の減少が同時進行し、ほぼ同数の減少を示していた。ということは働き場の減少が、人口減少の２倍のスピードであったことを示している。おそらくこのころは、町内に働くところがないので、別の都市などへの通勤を考えるか、不完全就業で我慢するというような状況があったと推測される。

それが1975年以降には、ドラスティックな就業者増を示す。

人口は、ほぼ横ばいであり、高齢化が進んでいるのに、町内で働く人の数は年々増加している。'80年にかけて約600人の「公務」（自衛隊か？）の増加が大きい比重を占めているが、'85にかけてはサービス業の増加が、町の産業を牽引し始めているように見える。

土産物屋や飲食店が急増している

近年ではサービス業と小売業の就業者以外はすべて減少傾向にある。サービス業という柱なしに、この町はもちろん、周辺の町も困るという状況になっている。人口と就業者の関係を、少しデータで見よう（前頁「人口と就業者の関係」表参照）。

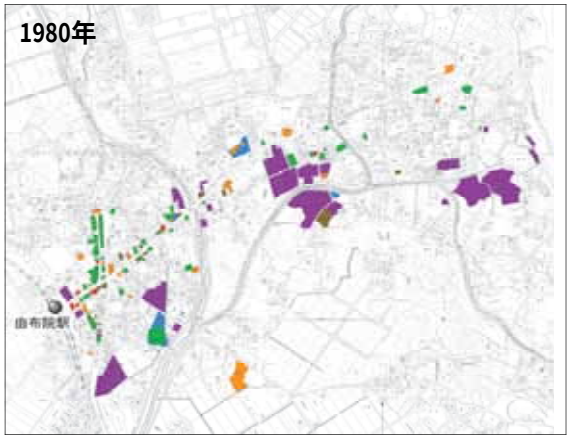
就業者の受け入れ率(b/a)が高いところは、経済力が高いともいえるが、就業者の集中率を大分県と比較してみよう。2000年の大分県の比率は47.8%であるが、'85年以降の湯布院町は50－60%を示しており、この町が周辺から雇用を受け入れる役割を担っていることを示している。逆に、2000年の7,129人の就業者は15,000人近い人口規模に相当するともいえよう。

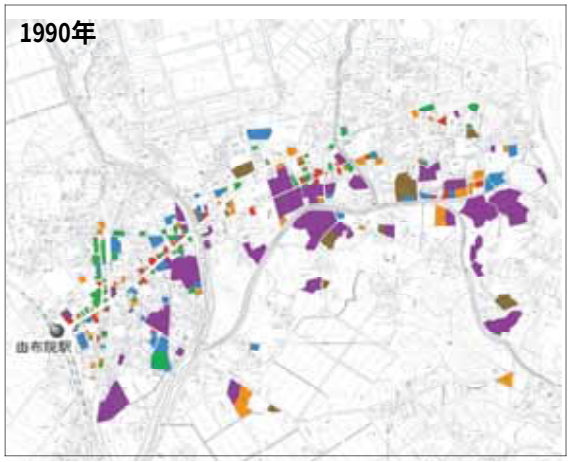
このような産業構造が、湯布院町を考えるすべての前提になっている。

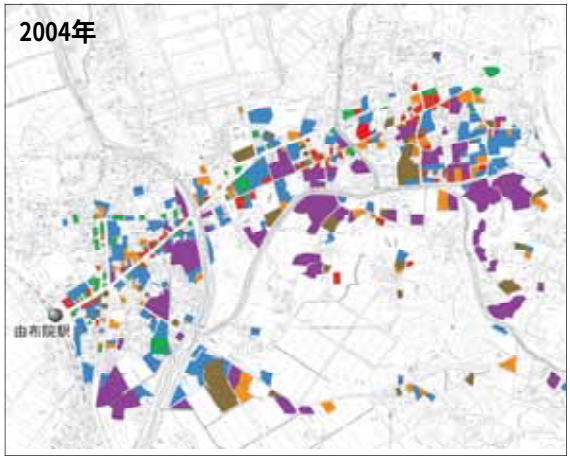
●街の形も一変。土産物店、宿泊施設、駐車場の急増で土地利用も一変、交通事故等の問題もおこる

「このごろ由布院は土産物店が増えて、無茶苦茶な街になっている」というような噂は聞いていた。私も数年行っていなかったので、今回行った時、土産物店が二倍ぐらいになっていると感じた。

街の変化のプロセスを見るために、住宅地図を元に、一般商店、駐車場、宿泊施設、土産物店、観光遊戯施設等を図上に着色した。しかしこの「よかネット」はカラー印刷ではないが、1971年、1980年、1990年、2004年の地図を見て雰囲気だけでも感じていただきたいが、土地利用の転換がものすごい勢いで進んでいる。当初の大区画のところは宿泊施設である。面積では当初ほとんどなかった駐車場も急増している。事業所数では土産物店の増加が著しい。この住宅地図と観光協会の資料をつき合わせてカウントして、事業所数の変化を出したのが次表である。







	'71	'80	'90	'95	'00	'04
一般商店	58	60	60	55	54	50
駐車場	1	5	36	69	106	120
宿泊施設	23	28	40	54	55	54
土産品店	6	9	32	64	75	92
飲食店	16	27	52	65	79	83
娯楽･遊技施設	5	14	20	42	59	56

湯布院の事業所数の推移

この表で見ても、「二倍ぐらいになっている」と感じたことは当たっているようだ。

一般商店はもともとＪＲ駅から町役場までの「花の木通り」に集中していたが、商店街の構造が変わったことによって、そこはシャッター通り化している。そして、他地区で増えた数を含めても店舗数は変化していない。

駐車台数のカウントができなかったが、駐車場は土地利用面積としても色分けされた広がりは、すごい面積になっている。それも、湯の坪街道沿いや金鱗湖周辺に集中し、交通事故などの原因になっている。

宿泊施設は数の上では二倍程度であるが、収容力はそれ以上の増加だといわれている。

観光産業化の最も大きい影響は、土産物店や飲食店の増加に現れている。ここ30年ぐらいの間に、150店舗ぐらいの増加が起こっていることを示している。「問題だ」というような意見もあるが、全国どこに行っても「商店数の減少問題・シャッター通り化」が唱えられているときに「増えすぎて困る」という状況は、単純に悪いこととはいえない。観光客の増加が続いていることの結果を表していることには違いない。問題は店舗の形や土産品の内容であろうが、それはまた今後の課題であろう。

●観光産業は、典型的な地場産業であり、地域経済に対する波及効果が最も高い産業である

アンケートと聞き取り調査をあわせた結果から見ると、観光産業、特に宿泊施設の地域への経済波及が大きいことが分かった。

観光関連業種を宿泊施設、観光施設(美術館、有料入場施設など)、その他のサービス業(理美容、リネンサプライ、駐車場など)、飲食店、土産品小売業、その他の小売業(土産品以外の一般小売り)の６種を観光関連業種として、アンケートによるデータをそれぞれに集約し、５次までの波及効果の推計を行った。それぞれの業種の観光売り上げに対する波及係数を、対湯布院内への波及と全域への波及総計を列記すると、下の通りである。

	〈域内波及〉	〈全域波及〉
・宿泊施設	2.165	2.850
・観光施設	2.100	2.741
・その他のサービス業	1.759	2.301
・飲食業	2.063	2.732
・土産品小売業	1.765	2.511
・その他の小売業	1.608	2.367

湯布院内への波及ということでみると、最大が「宿泊施設」で、「その他の小売業」が一番小さい。2.165と1.608という数値でみると、一見大差がないように見えるが、実際は大差がある。「宿泊施設」は域内の連携が強いので、お客様からいただいた1.000という売り上げに対して、1.165の追加売り上げが発生する。一方「その他の小売業」は0.608の追加にすぎないことになっている。簡単に言うと、前者の１億の売り上げは、地域内に1.2億の経済活動をもたらし、後者は0.6億の経済活動をもたらすということで、地域にとっての効果は２倍の違いになっている。

一般に観光関連産業は、サービス産業的な要素が強く、地域密着度が高いので波及度も高いのが普通である。ということからすれば、比較対象に建設業、製造業、運輸・通信業などと比較すると、差はいっそう顕著になるはずである。しかし今回の調査では、それらの業種に対しては標本数がわずかなので、比較をさけた。

従業員の居住地は75.6%が、旧湯布院町内であり、当然のことながら支出経費の最大比重を示す人件費は，旧町内へ残ることになっている。そういう事情もあって、宿泊施設の波及効果が大きく現れている。

※この調査は(協)地域づくり九州が受託し、聞き取り調査などのフィールドワークは糸乗(じねんプラン)と新貝(ジーコム)があたり、デスクワークは㈱よかネットと㈱ジーコムがサポートした。この稿には入れていないが、湯布院の多くの方々に、インタビューやアンケートの書き込みによって意見を聞いた。関心をお持ちの方は、糸乗（tel:092-327-2477、mail:itonori@mue.biglobe.ne.jp）と新貝(ジーコムtel:092-283-2085)にお問い合わせ下さい。

第２回糸島サロン報告

糸島の地域づくりで思うこと･感じること

本田　正明

３月11日に２回目の糸島サロンを開催した。話をしてもらった久保さんは、志摩町役場で仕事をしている。私が学生のころ、環境と共生した"楽農型住宅地"なるものを提案・プレゼンしたころからのつきあいで、かれこれ７年ぐらいになる。

関わっている場所は違うのだが、志摩町の地域づくりにお互い関わっていたので、「どんなことで悩んでいるか」、「人手の協力ができないか」といった情報交換や相談できる場をつくりたいね、という話から"糸島地域づくりなんでも相談会"という形で、地域の取り組みを紹介する会や海岸清掃や竹の伐採を行った仲間でもある。今回は地域づくりの活動に関わりながら、日頃思っていること・感じていることを話してもらった。

久保さんは、この日のために熱心に資料作成までしてくれていて、最初に二丈町と志摩町の地域づくりの取り組みの比較表が出てきた。「自分んとこの話だけでは、１時間も話がもたんと思って。普段から気になっていたし、いい機会なんで二丈町の担当者に話を聞きにいったんですよ」と恥ずかしそうに、二丈町と志摩町の地域づくりの違いなどの話を始めてくれた。

そもそも志摩町で"地域づくり"というものが始まったのは平成12年頃のこと。「地域と行政が協働してまちづくりを行えないか」という町長の思いからスタートしたそうだ。これ以前から、志摩の朝市が昭和61年に始まっており、工房めぐりをする"志摩の五月"というイベントなどはあったのだが、"町外の人ばっかり楽しませる地域づくり"だけでなく、"地元の人ももっと楽しめるような地域づくり"というのを目指したようである。

二丈町もほぼ同時期から取り組みが始まっているのだが、二丈町の場合は町の職員の６割以上が町外者になってしまい、地域のことを何も知らないようになってしまったので、"地元の人と酒を飲んだりして、職員がもっと地域のことを知ろう"という思いで始めたそうだ（ちなみに志摩町役場の町外者は４割程度）。このような町外職員数や地域に対する意識が影響したためか、取り組み方も自然と異なっている。

志摩町は５校区で地域づくり推進委員を任命して派遣しているのに対し、二丈町は35の駐在区（自治区）に、職員全員がボランティアで関わっている。地域づくりの取り組みの内容は、それぞれの地域で内容も進捗状況もずいぶん違うのだが、久保さんが関わっている芥屋の地域づくりでは、海岸清掃活動から地元で採れたレモンやサツマイモなどをセットにして宅配便で販売したり、人参玄米茶なる加工品を開発して販売したりと、地域の産業づくりにも力を入れている。広報誌も9号まで出ていて、見ていると以前は２つだった地域づくりの部会も、生活環境、産業、広報、くり愛と４部会に増えているようだ。二丈町の地域づくりは、地域が現在困っていることや身近なことをテーマにしているようで、地域の魅力などをマップにしてみたり、小学校の分校だった建物を改修して、地元のたまり場やギャラリーにするというような動きが出ているそうだ。

その後、サロンに参加した人たちと議論をしたのだが、糸島の魅力や住んでいる集落の話などで話が盛り上がったので、そのいくつかを紹介したい。

・親戚の子どもが"うつ"とアトピーなのだが、糸島に来て毎日海や自然を眺めていると元気になった。糸島の自然が人を元気にしてくれる。
・白糸地域のあじさいが魅力的。最近人も増加。
・彼岸花に似た狐の剃刀（きつねのかみそり）の花もきれい。糸島には、はまぼう・あじさい・きつねのかみそりと３つも花が魅力的。

	志摩町	二丈町
校区	５校区	３校区
自治会	42 駐在区	35 駐在区
職員の支援	・地域づくり推進委員６名を任命。 ・各町立公民館に主幹職１名配置。	・35 駐在区にボランティアで職員 81 名を配置。
実施時期	平成 12 年度から	平成 13 年度から
目標	①地域のコミュニケーションづくりをしてもらう。 ②地域が結束してなにかをやる。 ③地域づくりは手弁当が目的。	①駐在区の地域将来像を計画。 ②元気づくり事業で共働のまちづくりを推進する。 ③駐在区の自立が将来像である。

志摩町と二丈町の地域づくりの比較表

芥屋の地域づくりの通信と人参玄米茶

・糸島の魅力は点になってしまっているので、それをつなぐことをしたい。
・昔のJRの駅長さんは、"電車を使って糸島を巡る人はいない"と厳しかったが、今の駅長さんは、自分たちで糸島を見て回ってマップを作ったり、地域づくりに協力的。
・志摩は遊びにくる人にとって魅力的なところだが、都市計画で住宅などの土地利用がかなり制限されたので、住みたい人になかなか対応できていない。
・都市計画の線引きをしてから、５年近く経つので、そろそろ中間総括をしてもいいのではないかなと思う。
・集落の組長をさせてもらったのだが、お宮の世話などが、サラリーマンの生活とはまったく関係なく平日に組まれたりしたので、苦労した。でも、地元の人の名前を全部覚えられたので、非常によかった。
・自分のいる集落では、みんなで毎月1,800円ぐらいづつ積み立てて、400万円かけて地元のお堂を作ったりしている。
・前原の市街地にある古民家を改修して、飲食店と地域の交流スペースをつくった人がいる。落語の寄席なんかもやっているので、サロンに呼んだらどうか。

などなど、今まで知らなかった糸島情報をいろいろ仕入れることができた。糸島には行政が始めた地域づくりの活動以外にも、いろいろ活動している団体がある。今後はそうした人たちや上記に挙がったような人たちにも声をかけて、糸島の地域づくりの輪を広げられたらと思う。

（ほんだ　まさあき）

柳川ベロタクシー運行実験報告

原　啓介

平成17年度都市再生モデル調査の採択を受け、柳川の観光交通インフラ整備実験を行った。

柳川の観光客数は平成15年以降減少しており、川下り、御花、白秋生家といった、これまでの柳川観光の柱も、利用客数が減少している。また、柳川観光で最もポピュラーなコースは、「午前中に団体バスで出発し、昼は柳川でうなぎを食べる。その後、川下りを楽しみ、別の観光地へと向かう」というものであるが、観光客からはそれ以外の観光メニューがほしいという声も多い。

そこで、これまでの観光メニューに加え、新しい遊びの実験をしてみようということで、“ベロタクシー”の運行実験を行うことになった。実験は、柳川のひな祭り「さげもん祭り」の期間中（２月18～26日）に行い、車両は「ＮＰＯ法人長崎・伊王島活性化を目指す会」から２台お借りした。コースは下図を参照。料金は、コース一周（60分以内）貸し切りで、一台1,000円とした。

ベロタクシーは運転免許や運行許可は必要ないが、教習を１日受ける必要があるということで、一通り操作やメンテナンス、接客方法などを習った後、ドライバーとして実験に参加した。

実験開始当日は天候も良く、実験のことが新聞

ベロタクシー運行コース

ベロタクシーは柳川立花藩別邸「御花」の前に設置した

乗った方からの評判は大変良く、「柳川によく似合う」という声が多かった

等で紹介されたため、利用者は10組と、実験期間中で客が最も多かった。ベロタクシーは常に客を乗せて運行している状態で、さっそく足が筋肉痛になった。実験期間の８日間のうち、３日雨が降ったこともあり、利用者は結局42組であった。

利用客にアンケート調査を行ったところ、「また乗ってみたい」「普段見る機会がないところまで回ってくれる」「非常に快適」「一生の思い出になった」なといった声が寄せられベロタクシーの評判は非常に良かった。「柳川でまた乗りたい」と回答した人は７割以上であった。

ベロタクシーは窓がないため、まちの雰囲気を肌やにおいで感じ取ることができ、乗り降りも簡単なため、ちょっと買い物をしたり、つまみ食いをしながら観光を楽しむことができる。「船着き場が決まっている川下りよりも、融通が利いていい」、「水上観光はどんこ船、陸上観光はベロタクシーというコントラストがあって面白い」という意見もあった。

今後、仮に柳川でこのタクシーを運行する際の１番の課題は、広告収入が多くは望めない柳川市で、料金収入で運行できるためのシステムをどうつくっていくかということである。今回は実験ということで、料金は低めに設定したが、利用客からは「１時間貸し切りであれば、2,000円くらいはとっていい」という意見が多かった。また、ひな祭り等のイベント期間中以外の時期の運営をどうするかという問題もある。さらに、今回の実験期間８日間のうち３日も雨が降った。覚悟はしていたものの、天候に左右されやすい乗物でもある。

シクロや今回実験したベロタクシーといった、観光客のための遊び型移動手段については地元の柳川市観光協会が検討していくこととなるが、川下りの会社が乗物を所有し、船頭さんがガイドするのもいいかもしれない。個人的には柳川のまちをベロタクシーが走る姿を是非また見たいと思う。

（はら　けいすけ）

今年で6年目を迎えた 佐賀城下ひなまつり

少しずつ進められている人材育成

愛甲　美帆

今年で６年目を迎えた佐賀城下ひなまつりが２月18日から３月30日まで佐賀市で開催された。

佐賀城下ひなまつりは、明治39年建築の旧古賀銀行、大隈重信が泊まった部屋がある旧古賀家、18世紀初頭に建築されたと推定される旧牛島家など歴史的建造物が残る柳町地区を中心として開催されており、江戸時代佐賀藩の紋様である胡麻柄を図案化した鍋島小紋や佐賀錦の人形が展示される。

また、鍋島家に伝わるお道具や古文書を所蔵する徴古館では鍋島家のひなまつり道具の展示も行われる。今年の目玉は、14代今泉今右衛門の「桃」をテーマとした作品が展示された。

各建物の展示テーマは毎年替わっている。また、商店街の一角には、丸ボウロなど佐賀の銘菓が日替わりで実演販売され周囲にできたての臭いを漂わせる。夕方や子ども達には人気のお土産販売処もある。

ひなまつりが始まった01年は約４万人が訪れ、その後序々に増え昨年と今年は10万人を超えた。アンケート調査によると、県内外の来客比率はほ

ぼ半々となっており、近年はリピーターの割合が高いようで、50～60歳の女性が５割を占めるイベントである。

●“もてなしのまちづくり”観光ボランティア講座実施

佐賀市ではひなまつり実施と同時期に「佐賀市観光振興戦略プラン」を策定、翌年度の具体化事業の検討時には委員会の成果、佐賀の観光振興や方向性について公開で委員会を行い、市民との意見交換も行った。このなかで、市民の力で観光資源を開発するため“もてなしのまち佐賀づくりプロジェクト”が掲げられた。

市では、第３回ひなまつり以降、期間中観光客を案内する観光ボランティア講座を開催し、市民ガイドの育成に取り組んできた。

当初はひなまつり会場となる地区の歴史の概要と接遇研修が主であったが、年々講座内容は拡充され、３年目にはまちなかにある恵比須像を巡るボランティアガイド育成も兼ねた講座となった。この恵比須像を巡るツアーは、唐津市にある宝当神社とセットでまわって宝くじ祈願をするなど人気のツアーとなっている。さらに、今年はひなまつり会場となるメインの柳町地区以外の観光資源もより詳しく紹介していこうということで、お寺や旧長崎街道を歩くなど講座内容は会場周辺にも広げられた。また、秋に実施されている20年続く“佐賀バルーンフェスタ”の観光ボランティア育成講座や観光従事者向け講座としてタクシー会社への講座も実施された。

●講座3年目には有志の呼びかけで団結会を開催

参加される観光ボランティアの方々は、40～70歳代が中心で非常に勉強熱心な方達である。毎年仲間に会えることやお客様との会話を楽しみに参加されている。３年目の活動となった昨年は、有志の呼びかけによりひなまつり最終日に近所の焼鳥屋で、打ち上げ＆団結会も催された。そして今年の講座初日には、その団結会で事務局を担われることになった方がパソコンで作られた、両面書き込まれたカラフルな「観光ボランティア通信」が配布されていた。昨年参加された方の抱負や新しくできた観光資源情報など写真入りの大作である。今年は、講座が進む度に通信を作成し、参加者に配布されていた。

今年の講座では昨年オープンした佐賀城本丸歴史館の見学も入っていた。佐賀城本丸歴史館は県が運営する建物で、通年で活動する案内のボランティアがおられる。ひなまつりで活動されるボランティアも多く参加されており、交流会を兼ねた講座となった。交流会では「せっかく勉強しているのだから、互いに情報交換をもっとしていきましょう」と盛り上がった。

受講者の中には「佐賀ん町屋ば更生らす会」のメンバーがおられ、今年はひなまつりの新たな会場として明治期では珍しい木造３階建ての旧旅館を開放され「まゆの雛人形展」と休憩処をつくられていた。その他にも「近所のお店に貼ってもらうように頼むから」とポスターをもらって行かれたり、「友人・知人に宣伝するからパンフレットはありませんか」と期間前から周囲への宣伝を積極的に行われる方など、本当に佐賀が好きなんだなと強く感じた。

●市民の動きをどうつなげていくか

佐賀市観光課によると昨年、一昨年に比べ今年はツアーよりも個人客の来訪が多くなったということだ。４年かけて、じわじわと動きはじめたこのような市民によるもてなしの活動を、今後どのように活かしていくか、行政と市民の連携が期待される　　。（あいこう　みほ）

社団法人都市住宅学会九州支部
住宅政策シンポジウム報告

これからの住宅政策

雪丸　久徳

３月25日（土）九州大学西新プラザにて、(社)都市住宅学会九州支部主催の住宅政策シンポジウムが行われた。運営スタッフとして手伝いながら話を聞いてきたので簡単に報告したい。

都市住宅学会は、都市住宅・居住についての個別分野の中だけの研究に留まらず各分野が相互に交流し総合的・体系的な研究に高めることを目的につくられた学会であり、九州支部は2003年４月に設立された。九州での大きなイベントは今回が初めてで、基調講演として国土交通省社会資本整備審議会委員(住宅宅地分科会会長である小林重敬先生（横浜国立大学大学院工学研究院）に「これからの住宅政策－新しい取り組みと展望－」をテーマにお話を頂いたほか、九州で実際に住宅行

政に関わっておられる県や市の担当者を迎えてのパネルディスカッション・テーマディスカッションと５時間に及ぶ盛りだくさんの内容であった。

小林先生の基調講演ではまず、住生活基本法制定の背景として、これまでは国主導の住宅政策の枠組みであったのが、地方分権の社会に馴染まなくなっていることや、住宅建設五箇年計画の変遷（住宅難の解消→量の確保から質の向上→市場・ストック重視）とその限界について、国の審議会の議論を交えながら話してくださった。また、住生活基本法の内容について、目的・基本理念・責務・基本的施策・計画について建設計画法との比較や事例紹介を含めた説明があり、基本法の枠組みをとてもわかりやすく理解することができた。

続いて行われたパネルディスカッションでは、「これからの住宅政策はどうあるべきか－九州での展開－」というテーマで九州の自治体（福岡県・大分県・宮崎県・福岡市・北九州市）の取り組み、課題・展望について意見交換が行われた。自治体によって課題・展望は様々であるが、まとめると、①いかに住み替え支援の有効化を図るか、②市町村合併後の居住サービスのあり方、③財政基盤が縮小するなかでの政策の重点化、④公的住宅の建て替え、⑤住宅困窮者への住宅支援、が住宅政策上のポイントとなるということであった。

さらにディスカッションの後半は、「住宅政策における市場の形成と活用」、「公的賃貸住宅の役割」という２つのテーマに絞って議論が行われた。まず、住宅施策の中で市場整備をどう進めるのかについては、単なる情報提供だけではなく、それに加えて地元の関連産業との連携をどうつくるかが重要という指摘があった。

その他にも住宅市場そのものが成立していない過疎地域の問題や空き家対策はどう考えるのかといった議論もあった。

さらに公的賃貸住宅に関する議論では、そもそも公的賃貸住宅は一番困った真の困窮者に使って頂くべきであり、住宅困窮者の定義づけや、入居基準の見直しが必要だという制度の問題や建て替えやその配置の問題、コミュニティの問題について議論された。

住生活基本法が制定されることにより、基本理念に沿って具体的な政策内容は地方自治体で定めるという地方主導の住宅施策に徐々にシフトすることになる。まさに、住宅政策で地域の力や知恵が試されるところまできている。そういったことからも地域間の連携、情報交換の場として今回のようなシンポジウムが定期的に開催されることが望ましい。自治体、民間事業者、居住者の協力のもとで、多くの共感を得るような住宅政策をつくり全国に向けて発信するといった主体的な姿勢を持つことが九州全体のレベルを高めると感じた。

（ゆきまるひさのり）

佐賀市の山の幸をいただく

原　啓介

昨年10月、三瀬村・富士町・大和町・佐賀市・諸富町が合併、新佐賀市が誕生し、当社は合併に伴う新佐賀市観光の魅力整理・再評価等のお手伝いをした。先日、佐賀市の方から「富士町の菖蒲ご膳を食べてみませんか」という嬉しいお誘いをいただき、行ってみた。

食事をつくっているのは、富士町菖蒲地区の主婦の方々でつくる「山野草つみ料理愛好会」である。愛好会では、旬の山菜を使って毎月１回（第２日曜日）、菖蒲地区の自治公民館での食事会を続けているそうだ。発足は平成７年とのことなので、今年で11年目になる。

今回参加したのは、農林水産課主催の「新さがの食と農ツアー」のプログラムのひとつであり、参加対象は佐賀市内の親子連れの方々であった。

食事が運ばれてくると、見たこともない山菜や、花の天ぷらや和え物、煮物が並んでいる。普段は山菜料理を口にする機会が少ないので、見た目だけでは味が想像できないものが多かった。とくに、やぶ椿の天ぷらは、紫色の直径７～８㎝ほどもある花をそのまま天ぷらにしたもので、見た目のインパクトに加え、サクッとした食感も良かった。盛りつけは、箸置きやお皿の端に花がおかれていて、とても細やか。メニュー11品で1500円、とても安いと感じた。参加者からは「滅多に食べられない」「お母さん、作り方を聞いといて」という声が挙がっていた。

準備には１週間程度かかるものもあるそうだが、この味に惹かれて、県外からも多くのお客さんが訪れるそうだ。山野草つみ草料理愛好会の西要子

写真が一人前。かなりのボリュームである

＜菖蒲ご膳　メニュー＞

食前酒　：あんず酒
吸い物　：よもぎかまぼこ、野かんぞう、すみれ
酢の物　：のびる、鳥皮
和え物　：春菜の白和え
煮物　　：こんにゃく、人参、菜の花、かしわ、ごぼう、たけのこ
季のもの：ごまどうふ、つくし、わさび、ふきのとう
てんぷら：やぶ椿、ふきのとう、菜の花、よもぎはこべのかき揚げ、きくいも
めし　　：はぎなめし
デザート：みかんゼリー、ごぼうドーナツ
その他　：菖蒲まんじゅう、香の物

さんがおっしゃっていたことは、「まちづくりや女性運動ということではなく、地域のために何かしたいという思いが出発点でした」ということであった。佐賀市富士町では、嘉瀬川ダムが建設中（2011年度完成予定）であり、今回食事をした菖蒲地区はダムが完成すると、水没してしまうらしい。しかし、ダム完成後は、新たに店舗を建て、営業日も増やす予定だそうだ。

新佐賀市の山間部には、他にも毎週日曜に山菜バイキングを楽しめる「やまびこ交流館」（旧三瀬村）や、手打ちそばと創作料理を楽しめる「与楽庵」（旧富士町）など、古民家を改築した落ち着いた空間で、山菜など地のものを振る舞ってくれるお店がいくつか出来ている。

ちなみに山野草つみ料理愛好会は、福岡市のレストランにも食材・料理を提供しており、レストラン「クール・ド・マキイ」という店で第２日曜日にいただけます。　　（はら　けいすけ）

所　員　近　況

■桜より先ず駐車場の広さに驚く「一心行の桜」

「一心行の桜」については、４～５年前に阿蘇町にいる姉から『とにかく凄くて、時期になると大渋滞を起こす。テント小屋がいくつも並び、地元農家が店を出している』といった話を聞いていた。また、毎年４月になると、バスの運転手席の裏にぶら下げられている日帰り観光ツアーのチラシでもよく見かけていた。大渋滞を起こす「桜」とは、一体どんなものなのか前々から非常に興味があり、機会があれば是非見たいものだと思っていた。

４月７日（金曜）、菊陽町の役場に行く機会があり、用事が済んだ時間は14:30ごろだった。また、同じ道で帰るのも癪なので、阿蘇経由で帰ろうかと思った、その時に「一心行の桜」のことを思い出した。地図をみると「一心行の桜」がある旧白水村（今は久木野村と長陽村とが合併して南阿蘇村となっている）まで約25㎞程度、時間にしても30分程度でいけそうだったので、この機会を失っては二度と見れないだろうと思い、一路、「一心行の桜」を目指した。

「一心行の桜」専用駐車場近くに来ると平日の15:00を過ぎているにもかかわらず、20～30台程度は渋滞していた。さらに駐車場に入るまで約15分程度がかかったように思う。とにかく駐車場が広くて、第５駐車場まであるのには驚かされた。町の観光案内のホームページを覗くと駐車場台数は1,000台程度。満開の時期になると平日でも２万人、土・日だと３～４倍の６～８万人が、この桜を目当てに集まるとのことである。

つまり、「一心行の桜」は１週間～10日間で20～30万人を集客するという季節限定・瞬間型観光資源の典型のようだ。親切にもホームページには「朝９時までに到着すると良い」とのコメントもある。私が止めた駐車スペースのところのナンバープレートをみると、熊本ナンバー以外にも福岡、北九州ナンバーも結構見られた。福岡を中心に北部九州一円から来ているようだ。

本題の桜の話をすると、桜の前に立てられている案内板には『天正８年（1580年）島津氏との戦

とにかく駐車場が広く、看板の左隅に見えるのが「一心行の桜」

土曜・日曜日に6～8万人が集まる「一心行の桜」

いで矢崎城（宇土郡三角町）で戦火に散った峯伯耆守惟冬（みねほうきのかみこれふゆ）の菩提樹とされている。妻と嫡男は少数の家臣と故郷のこの地に戻り、惟冬と一族の御霊を弔うため一心に行をおさめたということで「一心行」の名がついたとされている』と記されている。聞くところによると、８年前ぐらいに全国系のテレビで放映されたことがきっかけで、見学者が年々増え、周辺の田畑を駐車場にしたことからさらに増えてきたとのことである。

もし、見学されたい方は、たぶん朝８時ぐらいに到着することを目標に出かけないと渋滞に巻き込まれることになると思う。来年、興味ある方は樹齢420年の桜と駐車場の広さを見るためにお出かけください。　（山田　龍雄）

■パチンコ機械の進歩に脱帽
“パチンコ～冬ソナ”を体験

●手動式の時代は、パチンコ台と対話ができていた

小生のパチンコとの出会い、付き合いを思い出すと、最初は小学校の５～６年生ごろ親父に連れられて親父から玉を５～６個もらい、試し打ちをさせてもらったのが最初であった。この時のパチンコはもちろん手動式。大人たちは器用にも10数個の玉を片手に握り、１個々玉を親指の爪側で、機関銃のごとく穴の中に押し込んでいた。子供ながらも、この技をマスターしたいと思い、見様見まねで試していたように思う。その後は、大学生になってからで、暇にまかせて最もパチンコに時間を費やした時期であった。この当時、レバー前のケースに玉を入れ、これも１個々玉を手動ではじき出すタイプであった。大学にいたころの昭和45～51年頃までは、この手動式タイプではなかったかと思う。

福岡に来た当時の昭和56年には既に自動式になっていたように思う。この頃は仕事も忙しくなり、パチンコは列車の時間待ちの場合など、年に１～２度程度になり、最近は全く皆無であった。

今、思うと手動式の方が、こちらのペースで玉を打つことができ、いうなればパチンコ台との対話を楽しんでいたように思う。自動式になってからはなんとなく機械ペースでのパチンコになり、パチンコ台と対話できる楽しみがなくなったこともパチンコから遠ざかった理由かも知れない。

●物語性とギャンブル性を同時に楽しめる“パチンコ～冬ソナ”

最近、よく出かける韓国料理店のママさんから、“パチンコ～冬ソナ”が如何に面白いか、このパチンコで冬ソナのストーリがすべて分かるというような話をハイテンションで聞かされた。何度聞いても詳しいルールがわからない。

そこで、パチンコ台の進化状況を確かめるべく、さっそく４～５年ぶりにパチンコ屋に入った。

目的の“冬ソナの台”は、４列（１列22台）88台あった。小生の座った列と後ろの列（あわせて44台）を見渡すと女性客が15～16名であり、女性率は実に３～４割。他の機種のパチンコ台の列のところと見比べると、やはり冬ソナ台の方が女性率が高いようであったから、メーカー側のネライは当たっているといえよう。小生は、久しぶりのパチンコなので、玉の出し方を店員さんに聞き、千円札をパチンコ台横の札入れ穴に入れると、自動的に玉はケースに流れ込む。

いざ、やってみると“当たり”になるルールがよくわからず、あっという間に玉がなくなり、画面を楽しむ余裕無し。２回目以降は多少、余裕が

出てきて時折出てくる数字付きのチェ・ジウやペ・ヨンジュンなどの出演者の顔ぶれを楽しむことができたが、まったく“当たりなし”でウン千円をつぎ込んでしまった。

そこで、横の席の年配女性が大当たり（下の穴が開きっぱなしになる状態）していたので、観察していると、なんと第１話のストーリの要点が映像でながれ、解説が字幕スーパーで出てくるのである。この大当たりの時間は３～５分ぐらいあり、かなりの出玉となる。

当たりの仕掛けとしては、例えば、空港のシーンでチェ・ジウがペ・ヨンジュンを探すシーンが映像で流れ、後ろ姿の男性が振り向いてペ・ヨンジュンがニッコリ笑う映像がでれば、“当たり”といった仕掛けとなっており、年配の女性方にはたまらないのではないかと思う。ダメな場合には、ポラリスのネックレスが床に落ちて壊れるシーンが流されるなど、まさこの冬ソナのストーリにそったギャンブル性を備えているのである。

とにかく、パチンコの機械は、収益性を高めるため自動化や楽しめる仕掛けといったことで各メーカー知恵を働かせてきており、その仕掛けもここまで凝ったものが出てるとは、感服である。

今、負けた分を取り返しに行こうか、しかし、やっぱり返り討ちにあってしまうので止めておこうかという葛藤の日々が続いている。

（山田 龍雄）

■アマナツの怪2006

アマナツと関わりだしてから、７年ぐらいになると思うが、素人の悲しさで「もったいない」と思ってしまうので、放置するに忍びず、ついつい迷惑便に仕立てて送りつけ、多くの方に迷惑をかけている。その中で感じたことを少し。

世代によって味覚の境界線があるということ。

50～55歳ぐらいを境に、それより若い層には"酸味"というものにきわめて弱い人たちがいる。曰く「かなり厳しいが、何とか食べられる」から「恐怖が先に立ってとても……」。

一方、「甘い、一個をぺろり……」「まいにち食べるからもっと送れ」「そもそも、甘いだけで酸味のない果物なんて軽蔑している」まで、その味覚差は大きい。

昔の夏みかんは、確かに背筋に冷たいものが走り、身体が震えるぐらい酸っぱかった。しかしアマナツはそれほど酸っぱくはない。その出自を百科事典から紹介すると、夏みかんは山口県が起源で、アマナツは大分県の津久見市が起源らしい。ついでに言うと、今年から私の近所のスーパーに、アマナツが目立ちだした。今までは、樹に生ったまま放置されており、樹は傷むし、もったいないし、気になっていた。やっと現代人も、生来の酸味のある果物に対する嗜好が戻ってきたのかと感じている次第。

私はこのアマナツとの付き合いで、わがアマナツを汚す黄砂にいっそう敏感になったし、年々の甘みと夏から秋にかけての日照が気になるようになった。糸島の早春から初夏の風物詩です。

風物詩ついでにもう一つ。今年は冬が長く、ウグイスのやってくるのも遅かった。我がウグイスは、音楽的才能がないのか、下手なオリジナリティを唸りたいのか、ホーホケキョと教科書に載っているような鳴き方ができない。ホーケキョッケキョという繰り返しが多い。このウグイスがやっと３月末になって戻ってきた。調子はずれの我がウグイスの鳴き声を毎朝聞いて、楽しんでいる。

（糸乗　貞喜）

■鍾乳洞の泡盛と歓送会の酒

十年ほど前に、沖縄の金武町のあたりに、鍾乳洞の中で熟成させる古酒(泡盛)があると聞いて、探したが見つからなかった。また、五年前の４月か５月に沖縄に行ったとき、今度はしっかりと場所を確かめ、金武酒造に連れて行っていただいた。五年貯蔵のものを頼んで帰った（５年貯蔵が１万円､12年貯蔵が２万円）。もちろん、以前からすでに鍾乳洞で貯蔵してあったものを、買って帰り味わってみた。なかなかまろやかな味であった。

そのときの私の名前で貯蔵を頼んでおいたものが、５年たった。

一昨日金武酒造から連絡があり、「送り返す」か「貯蔵の延期をする」かの問い合わせと、追加申し込みの用紙などが送られてきた。後７年の延長をする気分も年齢のゆとりもない。早速送っていただき、私の70歳の誕生日に"御浄土への第一回歓送会"をやっていただきたいと思っている。

誕生日以後に、鍾乳洞五年貯蔵のものが残っているかどうかわからんが、同種のものを３～４本取り寄せてある。"よかネットパーティ"の時にでもご賞味下さい。

（糸乗　貞喜）

こんなカードを作って渡してくれる。
表（上）に私の名前と貯蔵場所など。

裏面（下）は私の瓶が入っている鍾乳洞内の写真

■第6回まちあそび報告

早いもので、「まちあそびの会」が６回目を迎えた。今回は、「博多新劇座」で大衆演劇を鑑賞した後、「博多百年蔵」で絞りたての日本酒をいただいた。

博多新劇座は、博多駅から10分ほど歩いたところの裏路地に面している。あまり目立つ場所ではないが、客席は満員である。60代以上が７割、女性が７割といった感じである。

劇が終わると、歌謡ショーが始まった。ハンサムな副座長が歌うときには、おばさま達は光るペンや腕輪をリズムに合わせて振ることになっているらしい。アイドルに熱をあげる女子高生と似た光景だと思った。演者が舞台の袖に近づくと、そのファンの方が一万円札を何枚か懐に差し込んでいた。あまりこういう場所に行く機会がない私からすると、まさに異空間で、大変面白い。

その後に行った博多百年蔵は、博多に残る唯一の造り酒屋で、明治初期創業。建物がとても立派で、結婚式等も開かれるらしい。ここではできたての日本酒の試飲や、博多の歴史・酒造の歴史をビデオでみることができる。　　（原　啓介）

開演前から満員御礼

『ケータイ・ネット人間』の精神分析
著者　小此木 敬吾
草思社

風邪で寝込んでいた週末のある日のこと。何もできないので、普段はあまり見ないテレビのチャンネルを切り替えていると、気がつくとあっという間に２時間経ってしまっていた。なにも考えずに時間をつぶそうと思ったら、テレビほど便利なものはないかもしれないと、布団の中で感慨にふけっていたのだが、よく考えてみると最近はケータイやインターネットもあるし、携帯できるゲーム機やオーディオ機器なんかもある。電車に乗って人間観察をしていると、半数ぐらいの人が、携帯とにらめっこしている。時間をつぶすには事欠かないようだ。

この本でいう「ケータイ・ネット人間」というは、こうした環境に生まれ育ってきた人たちのことで、共通する特徴があるのだという。自分も当てはまりそうだと思って読み始めたのだが、一番興味を持ったのが、"いつもマルチなチャンネルの切り替えを考えている"という話。

学校の先生が「このごろの子どもは、テレビを見ているようなつもりで授業を聞いているんですよ。テレビだったら、途中で立ったりおしゃべりしたり、面白くなかったら、消したりしてもいいでしょう。あれと同じような気分で授業を聞くようになってしまったんですね」というように、面白くない教師や授業をさっさと切り換えてしまいたくなる衝動にとらわれて、ひどいところになると、授業が面白くないと生徒が教室からさっさと退室してしまう高校もあるそうだ。

男の子と女の子のつきあいも"複数（マルチ）のつきあい"をするのが普通になっているらしく、著者のゼミ学生が「誰もスペアをもっているんですよ。一人がうまくいかなかったらこっちとやればいい、というふうに」などという話まで出てく

る。

ものごとを簡単に切り替えたり、リセットしようとする感覚は自分の中にもあるし、それ自体が悪いとは思っていないのだが、問題はその切り替えを"できるだけ自分が傷つかないため"の手段として使っているところにあるような気がする。ちょっと前に「友達以上恋人未満」なんて言葉が流行ったが、上記のマルチなつきあいも似たようなものなのではないかなと思う。そうしたお互い傷つくことは嫌、でも仲良くしていたいというような感覚では、本音を言い合えるような人間関係はなかなか生まれないのではなかろうか。

この本の中でも、そうした人間関係の距離感を「ヤマアラシのジレンマ」という形で、うまく説明してあるし、他にも「遊びと狂」、「1.5のかかわり」、「スーパーウーマン挫折症候群」といった現代の若者の心理を知る上でのキーワードがいろいろ出てくる。興味を持たれた人は、本書を一読してもらえればと思う。　（本田　正明）

ロレアル賞連続ワークショップ2006 in九州　「色」－科学と芸術の出会いのお知らせ

今年も「ロレアル賞連続ワークショップ」を福岡で行います。昨年大変好評だったマーブルペーパーのワークショップもあります。皆さん、是非連れだっておいで下さい。お待ちしています

●5月26日（金）　18:00～20：30

「昆虫はなぜその形と色になったのか？」

木村 政司　（日本大学芸術学部デザイン学科教授）
小檜山賢二(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授)
足立 栄希（日本ロレアル株式会社アドバンスドリサーチ チーフサイエンティスト）

●5月27日（土）　14:00～17:30

「赤、それは鉄が紡ぐ色」

野本憲一（東京大学大学院理学系研究科天文学専攻教授）
永山国昭（自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授）
高田潤　（岡山大学大学院自然科学研究研究科長・教授 2005年度ロレアル金賞受賞者）

●5月28（日）　13:30～17:00

「三浦永年によるマーブルペーパー特別ワークショップ」

参加費：7000円
定員：30名（道具等の準備がありますので、事前にお申し込み下さい。）
会場：旧冷泉小学校３階（26、27日と会場が異なりますので、お気を付け下さい）

日時　：５月26日、27日
会場　：福岡アジア美術館 あじびホール(140席)
参加費：一般／各日1000円　学生／無料
主催　：ロレアル　アーツ　アンド　サイエンス　ファンデーション
連絡先：㈱よかネット
tel：092-283-2121　fax：092-283-2128

編集後記

■４月に誕生日を迎えました。
誕生日と桜の満開の時期が重なることが多いのですが、今年は桜が散るのが少し早かったような気がします。20代最後の年ということで、来年は色々な意味で転機を迎える年になると思います。今しかできないことを精一杯楽しもうと考えている今日この頃です。　（は）

■この仕事に関わって25年経った。入社当時に関わった仕事は、住宅団地、未利用地開発等々ハード面の仕事が多かった。いまは産業振興、観光振興、施設再編など、まさにハードとソフトが一緒、あるいはソフトだけというのも多い。これで良しということはないが、次代への継承はなかなか難しい課題である。　（べ）

よかネット　No. 81　2006. 5

（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 042-501-2531
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋